

補遺と増幅

——ヘンリー・ヴォーン、『火花散る燐石』^{ひうちいし}以後の

森 田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) は『火花散る燐石』*Silex Scintillans* (1655) ——以後、本稿では『燐石』と略記——出版後も、郷里で医師として活動しながら詩作を続けた。どのような詩を書いたのだろうか。『燐石』上梓二十三年後に、先に亡くなった双生兄の弟トマスとの共同詩集の形で、『甦ったタレイア』*Talia Rediviva* (1678) が公刊された。きらめく火花を散らしながら登場した三十四歳のヴォーンも、五十七歳の熟年になっていた。この詩集の後半に「敬虔な想いと不意の叫び」(Pious thoughts and Ejaculations) の見出しで纏められている十九篇の中には『燐石』所収の作品と全く同じ標題の詩が四篇入っている。この部分の実態をまずみてみたい。学究で

博学のヴォーンらしく、次の作品から始まる。

彼の書物の群れへ To his Books

輝かしい書物の群れ⁽¹⁾！我らの弱い視力にとつての拡大鏡、
洞察力豊かな光の澄み切った投射。
燃え立ち 光輝く〈思想〉⁽²⁾、人間の死後の日、
飛び去った魂たちの足跡⁽³⁾、彼らの〈天の河〉⁽⁴⁾。
生きていて多忙な死者たち、拡張された〈聖霊〉⁽⁵⁾の
静かな声⁽⁵⁾、親切な天国の真白な〈魅惑びとたち〉⁽⁶⁾。
皆さんと共に生き、あの物知りの花々⁽⁷⁾のように生きて
光との交流に自らの時間の全てを費し、

《雲》とみれば戸を開き、影は悉く巧みに避けるもの
喜び急いで《太陽》には覆いを取って口付けする。

皆さん方の下は全てが闇であり、真暗な夜、

だからそこに生きる者は誰もが健康と視力を欲しがる。

皆さんを吸い取って賢い人々は（蜜蜂）のように

癒され豊かななる、唯 彼らはそれを甚だゆっくり行うが、
この上なく念入りにだからだ、我々は《蜜蜂》が牧草から
のように あるいはそれ以上に《書物》から多く貯える。

それから良いものを知ろうと努める優れた仕事となる、

雑草を識別し健全な《食物》を《判別すること》は

希少な作業なのだ、《人間》は死ぬのだから、しばしば

それを成し遂げずに、蜜蜂が子育てをして飛び去る間に。

しかし皆さんは全て選び抜かれた《花々》で、極上の物を

よく弁えている老練な花師によって見事に整えられていた。

それで私は皆さんの間で 雑草になってしまった！

知識が欠けていたのではなく注意不足だったのだ。

だから粗野な愚か者お前自身に感謝だ、知っても満足しそ

うにないのだから―何と過ぎたことだったか お前には！

[M・六五九―六〇]

訳注

(1) Bright books! : Decays (一―六行目まで) 修辭を敷衍

してゆく一例としてこの詩は、「息」「日」「曜日」「小考」(十

一) 29―30 ―神の息子にして太陽であるキリストの日と

しての日曜日を譬喩を重ねて定義した詩―や、G・ハー

バートの「祈り、一」「一四行詩、WIL・一七八」―魂

と神との対話である祈りを巧みな譬喩の重層で定義した詩

―と比較してみよ。譬喩を積み重ねる工夫はハッチンソン

に依れば「H・一六三」ウエールズ詩の特徴の一つで、*gathering*として知られている。「夜」「小考」(七) 35―40」の第

六連が例証になっている「RA・六七八」

(2) man's posthumous day この詩集の前半の部分に収録のヴ

ォーンの詩「作者オックスフォード在籍当時のトマス・ボ

ドリー卿の図書館について」「後出」の二九―三六行目参

照 [同]

(3) track of fled souls 「[記四] 沈黙と日々の隠密よ!」

「小考」(九) 6―7」の二五―二六行目「魂たちは／互い

に互いを追跡しなければならぬ」参照 [同]

(4) Milkie-way 「息」「日」「曜日」の二行目「《太陽》の輪

郭を《チョークで描いた》天の河」と比較せよ [同]

(5) still 地口、「silent」「列王記」上、19・12「火の後に

静かな囁く声があった」に倣ったような「静かな」と、*“con-*

tuning” チャップマン訳『オデュッセイア』17・七一

——「ユリシーズについては……彼は言う、名声がまだ生き延び続けていることを語っていた」の「生き延び続けている」との「同」

- (6) kind hearns white Decays 我々の福祉に関わる天国に居る祝福された魅惑者「同」／ヴォーンは価値の高いものを表すのに、公正な、幸せな、神聖な、祝福された、などと結びつけて形容詞「白い」を好んで使う「H・一六二」
- (7) those knowing flow's daisy (ひな菊・花言葉「純粹無垢」「平和」「希望」)・maigold (金盞花・花言葉「可憐な愛情」「別れの悲しみ」)のような「同」

収蔵されている貴重な書籍（九とおりに譬えられた後「皆さん」と呼ばれる）への（「お前」と呼び掛けられる作者自身の）憧憬と感謝の念が躍動しながら読者の胸に迫るこの詩の「彼」とは、訳注（2）が示唆するように、大英図書館に次ぐ世界有数の大図書館をオックスフォード大学に創建したボドリー卿を指すだろう。その図書館を歌った作品が、この詩集の前半に収録されている。

作者オックスフォード在籍当時のトマス・ボドリー卿の図書館について On Sir Thomas Bodley's Library

brary; the Author being then in Oxford

誇り高きゴルゴタを自慢なさるな、あなたが我らに人類の廢墟を示して 肉体とは如何に脆いものかを知らせられるにしても！ 我らには空っぽの（されうへ骸骨）しか見えなくても（3ラビたち）はまだここに生きている。彼らは死んではいなくて、再び（4血）で満ち溢れている、私が言うのは（5感覚）のことで、全ての（6線）が（7静脈）だということ。

彼等の（8埃）には打ち勝つな、ここに立ち寄る人は誰もが彼らの（9書物）の中に彼らの（10頭脳）の全てを見出す。古代パレスチナ王国だけが生き残っているのではない、アテネがここに息づいている、ブルータークの伝記の中でより。

オルフェウスの骨折りに向かって時々踊り落ちてくる石は（11）ここでは彼の音楽を再び確かに内に蔵つて。そしてあなた方ローマ（12精神）の体現者よ、学問があなた方を長生きさせたのだ、その（13帝国）よりも。カエサルは人々の（14世界）から滅び去っていったことだろう彼の（15剣）が彼のペンで救われなかったなら。

類^{たぐい}稀^{（8）}なセネカよ！ 何と長続きすることか あなたの生命^{ツキス}は？

ネロはそうだったが、あなたは出血《死》しても死ぬことはなかった

何と鈍^{（9）}かったことかその老練な《暴君》は あなたのなかそれを探すと、実際はあなたの《書物》に生きていたものなのだ。

難儀が我らの《血》を《インク》に変え、我々が着手するのは《執筆》が我らの《永遠》となる時なのだ。ルーキーリウスにここで私は注目して気付く、

彼の《協議^{（11）}》と彼の《生活》はあなたから出ていると。

しかし私はどう考えるべきか、あなたの《書翰集》は誰宛てなのか？

私はその《名前》を変える、するとあなたが私に手紙を書くことになる、

それでああなたの時と殆ど同じように悲しいこの《時代》に

あつては

あなたの莊重な《慰め^{（12）}》は 私へのものとなる。

哀れな《大地》よ！ たとえあなたの価値の無い埃が

こういう強力な《魂たち》の脆い《開い地》を包み込んで

も構わないのでは？

彼らの墓は全て《記録》されている、書き手は一人として《太陽》と同じように明るくあからさまでないものはない。そしてそれらの一部分が目立たずに落ちてきて

未知^{（13）}の、公^{おおやけ}でない《墓^{セル}》の中で滅び去ったのだが、それでも彼らの書物の中で彼らは《復活の日》への榮譽ある生き方を見付けたのだ。

この上なく気高いボドリー！ 我々はあなたへと向かっている^{（13）}

我らの《永遠》の少なからぬ部分を求めて。

あなたの財産は《馬》と《獵犬》には使われなかったし

あの新しい《流行^{モド}》^{（14）}にもまた。古い《国家》を困惑させるので。

あなたの遺産は別の道を行つたし

そのように使いそうな人々に遺されもしなかった、

あなたの安全で信用のおける《費用》は我らに流れ込んだ、

ウォルサム^{（15）}は今やオックスフォードの真中にある。

あなたは我々^{（15）}皆を自らの《後継者》にしてしまった 我ら

これから後何^{のち}を書こうとそれはあなたの《後裔》になる。

これはあなたの《記念碑》だ！ここにあなたは立つのだ

時間がその〈砂〉の最後の一粒⁽¹⁶⁾となって落ち尽すまで。

あなたの声なき〈亡骸〉がどこに安置されていようと

この〈墓〉は決してあなたの名譽を眠らせることはない。

依然として我らはあなたのことを考え続ける、我々の

名声は全て⁽¹⁷⁾ここで出合つてはあなたの名前の一〈文字〉を

語り合うのだ。

あなたは死ねない！ここだとあなたは安全以上でいられる
あらゆる〈書物〉があなたの大きな〈碑文〉になっている

所だから。

[M・六三三—三四]

訳注

- (1) マリラは、この詩はヴォーンがオックスフォード在籍中に書かれた様子はないと指摘する「Ma・二九九」が、ハッチンソンは在籍中の詩だと見ている「H・三一」。ボドリー（一五四五—一六二三）はオックスフォードの大図書館 The Bodleian を再建した（一五九七年創設、一六〇二年再開）学者・外交官。
- (2) *Golgotha* 「マタイによる福音書」27・33「ゴルゴタと呼ばれる場所、即ち髑髏の場所」、通常、キリストが磔にされたエルサレム郊外の処刑場で「墓地」を表すのに用い

られるが、ヴォーンはおそらく何か特定のオックスフォード冗談に言及しているだろう。各学監は *skulls* 「髑髏」と渾名されていたので彼らの集会室は「ゴルゴタ」が通称だった。OED のこの用例の最も早いものは一七二二年で、そこでの「ゴルゴタ」はクラレンドンの建物の部屋。この冗談はこの建物より古いかも知れず、ヴォーンの時代は学監集会の別の部屋がこの愛称だったことも十分ありうる

[RA・六五八]

- (3) *the Rabbits* タルムードやトーラに精しいヘブライの権威者 [同]

- (4) *They are not dead, but full of blood again* ミルトンの「良書は巨匠の精神が備えている貴重な活力源の生命の血 (life-blood) で、生命を越えた生命のために態々香気で満たされ尊ばれる」(*Areopagitica* vi [1641]) 参照 [同]

- (5) *Athens lives here, more than in Plutarch's lives* ブルータークの『英雄伝』は一五七九年にトマス・ノースによって英訳された。ヴォーンは言う、古代アテネについての知識は英国人にとって、もはやこの有名な書物にだけ依るものではないのだと [同]

- (6) *The stones...do lodge his muse again* オルフェウスの音楽の力は無生物さえ踊らせる詩の音楽だった [RA・六五九]

- (7) *Caesar had perished...his pen* ユリウス・カエサルは死

後も書いたもので生きている [同]

- (8) *Seneca* [Lucius Annaeus, c4ac-65ad] 富財で有名なローマの哲学者、一時期ネロの師。彼は静脈切開による失血死で自殺させられたが、同様の死を遂げた (68ad) ネロとは異なり後に大量の書物を残した。

- (9) *Afflictions turn our Blood to Ink* セネカの難儀の一つは、紀元四一年に冤罪でコルシカ島に追放され、八年間の配流生活を送ったことである。その間に悲劇九篇を含む多くの著作を物した。悲惨が執筆の刺激となったことを言う。

- (10) *Lucilius* Gaius 添え名ユニオル セネカの、カンパニア生れの年下の友人。彼に宛ててセネカは倫理と哲学を説いた一二四通から成る膨大な『道徳書簡』を表した。

- (11) *Counsels* ルーキリウスがシチリア島の長官だった時の支配方法 [R・A・六五九]

- (12) *Consolations* セネカの残した三篇の哲学論文で、コルシカ島配流の初期に書いた皇帝の秘書宛て『ポリュビウスへの慰め』と自分の母への『ヘルヴィアへの慰め』、及びそれ以前の『マルキアへの慰め』。

- (13) *we are bound to thee...our Eternity* 著者たちは各々の著書を保存されていることにボドリーの恩恵を受けている [R・A・六五九]

- (14) *that new Mode...confound* おそらく内戦時に古い秩序を覆した革命精神の政治活動 [F・三八一]

この詩がそれよりもっと早い時期に書かれたものと受け取れるなら、これはジェイムズ一世とチャールズ一世治下の若い後継者たちの浪費習俗を指すかも。彼等は豪華な衣装を購入して廷臣として目立つために自領地を売却し相続財産を抵当に入れた [R・A・六五九]

- (15) *Walsam* イングランド東部ノーフォーク州の村ウォールシンガム (Walsingham) のこと、処女マリアへ捧げられた有名な聖廟があり、宗教改革以前には巡礼者の中心地であった。オックスフォードのこの図書館は今や同じように(書物への)巡礼の中心になった [F・三八二] [R・A・同]

- (16) *their last grain of Sand* 砂時計の中の [R・A・六六〇]

- (17) *all our fame...one Letter...thy large Epitaph* 一六四〇年の拡張以前にこの図書館が入っていたT型の建物は、ボドリーの洗礼名トマス の頭文字Tを反映しているだろう。ヴォーンは 'Bodley' と 'Book' 両方の頭文字の一致を弄んでいる [M・a] [R・A・同]

ボドリーの死の際、一冊の記念詩集が出たが、その中の追悼詩の一篇には「一冊の本には小さな文字が沢山含まれている、ここには無数の書物を所蔵する一個の文字 [B] がある」の詩句がみえる [H・三一]、それをヴォーンは「碑文」と表現した。

諧謔のスパイスも程よく効かせた機智に富む十音節詩行の二行連句五四行の力作で、ボドリーと書物と世界の「知」への讃歌として、間然する所のない詩の名品ではあるまいか。前半部のこの作品と後半部の前掲作（同じ詩型の二六行詩）とでこの詩集は底を支えられているだろう。「彼の書物の群れへ」の次に作者は過去を振り返る。そして、既に馴染みの標題の作品が来る。続けてみてみよう。

振り返って Looking back

我が巡礼の、美しく光輝く〈山々〉と

花咲く〈谷々〉、その花々は星だった、

私の最初の幸せな時代の日々と夜な夜な、

不快な事も戦争もなかった時代、

その当時私は思索しながら君たち〈陽当りのよい〉峰々を

登りながらあの神聖な真夜中の〈光〉に注目していた、

それを頼りに歩いてゆくとカーテンの引かれた〈部屋部

屋〉と〈寝台〉が

他の景色を限ったり封印したりしたものであった、

おお その時何と明るく

素早く ある光が

私の心にブラシをかけ 夜を追ひ散らしたことが、

私の犯す罪が作り出した

あの陰を追ひ払いながら、

その間に私は芽生える、萎れたりしないみたいに！

何と見事な眺めだろう 明るい〈背後³⁾〉は！

そこでは花々や棕櫚が〈眼〉を生き返らせ

心地よく過ごせた日々が楽しい〈東方〉のように持続する、

だからその朝顔は枯れることなどあり得ないのだ！

[M・六六〇]

訳注

(1) When I by thoughts... 二つから八行目まで「真夜中」

「小考(七) 34」の一―四行目「私の〈眼〉に／(他の眼

が熟睡している間)／御身の多くの情報源である／星々が

寝ずの番をしながら輝く時」と比較せよ「M・七五九」

(2) O then how bright...scatter night 二つから一行目ま

で「鶏鳴」小考(八) 32―33」の四四―四五行目「私に

御身の光でブラシをかけて下さい、私が／申し分のない真

昼へと輝くように」と比較せよ「RA・六七九」

(3) How brave a prospect...Back-side この行はD.B.

Wyndham-Lewis, *The Stuffed Owl*「剝製の梟」(崇高々の

点では劣った詞華集)へと繋がった。ヴォーンは逆説を行っている。‘prospect’は「前方を見る」という意のラテン語 *prospective* 由来の語であり、‘backside’は「後方」の意である。ここからの四行は「後退」【小考(一) 17—18】の光に照らして見ると最もよく理解されるが、要するに無邪気な子供時代を振り返ることは、前方の永遠の生命を見ることがある。

ヴォーンはこの語を使うのに不注意だった。バイブルでは認められているが、*OED* の「後方もしくは臀部」という意味の説明は一五〇〇年頃に遡る。ヘンリー・モアはトマス・ヴォーンへの酷評の中でこの語を使っている。「まるで彼の五感はその背後にあり、頭部が欠けているみたいだった」(Henry More, *The Second Lash of Alazonomastix*, 1651. *OED* backside 3 に引用)【R・A・同】

‘backside’は、彼が「光輝く山々」の「陽当りのよい峰々」から振り返り見る自らの背後(譬喩では彼の過去の生活)。この語のこの使い方にびつたり当て嵌る語義は *OED* にはない。尚、【アスクの白鳥】所収の「故王」【チャールズ一世】の次女エリザベス追悼詩【M・六三】の三四行目にも ‘the back-side of bright dayes’ と同じ語が使用されている【F・四一五】

驟雨 The Shower

上空の水！⁽¹⁾ 永遠の〈泉〉！

露だ、⁽²⁾〈鳩〉の翼を銀色に染め上げる！

おお 歓迎、歓迎、悲しむ者たちには、

与えよ 乾いた塵に飲み物を、喜びを生む飲み物を！

多くの晴れた〈夕べ〉を、豊かで穏やかな

驟雨で芳しくなった多くの〈花々〉を

私は楽しんできたし、澄んだ光輝く⁽³⁾

〈太陽〉を来る日も来る日も満喫した、

しかしそれも この幸せな時間がこれほどの

〈夕べの驟雨〉で祝福されてこそのことだった！

【M・六六一】

訳注

- (1) Waters above 【森】【小考(二) 47—49】——生命の木々を育む上空からの水が讃えられている——と「種子密かに成長して」【小考(九) 26—28】——鳩となった聖霊が振り落してくる「活き活きとした一滴を！生命が保っている一滴を！」(二四行目) 希っている——と比較せよ【R・A・六

七九」

(2) the *Doves* = the Holy Spirits (聖霊の) [同]

(3) and down have run...*Sun* 日没を何度も見てきた、の

意。天体に關して用いられてきた時の 'run' については

OED run v9を見よ [同]

二行連句「二行ずつ対で押韻する」の八音節詩行十行の小篇で、田園の自然を静かに楽しんでいる趣も『燧石』の同題作「小考」(七) 13—14」と較べて澄んだ心境が窺えよう。

次に一転して、時の政情のようなものかを思ひを馳せた詩が現れる。

鍛鍊 Discipline

立派な 生命の王子⁽¹⁾、光の生き活きた泉^{ウエル}！

死と地獄の鍵の所有者！

もしも驃馬^{ラバ}びとがあなたの全盛期を輕蔑するなら

彼を闇の鎖で縛ってやろう。

彼には教えてやろう、どれ程深遠でどれ程多様であるかを

あなたの愛と心遣いに満ちた〈審議〉が。

恩寵の〈決議〉と長期の平和も⁽⁴⁾

反乱を引き起こして氣分を害するだけなら

彼には思うがままにさせてやろう

そうなれば彼は法律にしばらくられないまま遂には

自らの選択で傷つき 次々に犯す惡辣な

罪の棘でしたたかに悲しい目に遭うことになる。

もしも〈天国〉と〈御使いたち〉⁽⁵⁾、希望と浮き立つ氣分が

〈大地〉ほどにはあの土竜^{もぐら}を喜ばせないなら

彼には与えてやろう 掘り出すか住みつく彼の〈鉾山〉⁽⁶⁾を

そして忌まわしい地獄の或る悲しい〈地獄〉^{ズキーン}を。⁽⁷⁾

[M・六六一]

訳注

(1) prince of life キリストのこと。「使徒言行録」3・15

「あなた方は」神が死者たちの中から復活させて下さった生命の王子を殺してしまった。私たちがその証人です」

(2) mole この詩集(一六七八年版)のどのテクストも全

て 'mole' と読めるものばかりだが、この箇所の意味は

'mole' になるように思われる、ヴォーンは『燧石』の中の

「苦痛」【小考】(七) 30「一八行目では「驃馬 (mule) を、

御し難い人を」と詠っているが「F・四一六」。

‘mole’は「C」が認めた校訂だが、ラドラムは、ヴォーンは‘mule’と書いてそれを表すつもりだったと思われるのだから校訂を受け入れると作者の主旨は失われると信じている。ラバは、頑固を表す典型だとOEDは指摘する。この詩の三―二行目は、反乱と、‘mule man’の法律に縛られない行動、及び、そういう人の扱われ方に対するヴォーンの神への提言に関わっており、一三―一六行目は、人間のロバ流の頑固は表現の変化によって示唆されている―ロバは今や土竜だと見られているわけであり、人間の讃められすぎの自由とは、実際は、精神上の盲目のことだ[RA・六八〇]。OEDでは、‘mole’s²の綴りが‘moule’から‘mulle’まで種々異なっていることにも触れて、ラドマンは結局この本文に‘mule’を採る、即ち「驢馬びと」。

- (3) chains of darkness 「ペテロの手紙」二、2・4 「神は罪を犯した天使たちを容赦せず、裁くために闇の鎖で縛って閉じ込めた」／ヴォーンの散文作品「ノラの司教、聖パウリヌスの生涯」[M・三三九] 三一行目「…彼らは闇の鎖の下に腐り滅ぶ」、及び「規則と教訓」[小考(五) 1―6]の最終行「闇」の〈鎖〉と〈永遠の〉〈夜〉のために？」と比較せよ[RA・六八〇]

- (4) When Acts of grace...displease 「悲慘」[小考(八) 21―23]の八―一八行目では、〈主〉の音楽の中に気難しい心がないのに、私はかえって憤って反抗心を表し、それを

鎮めようとするが、そういう事態になるのも〈主〉の恩寵なのだと覚っている[同]

- (5) If Heav’n...so much as Earth 次のBrowne[Sir Thomas (1605-82)]の「地下の闇の中で生きるせいで」[モグラたちは]光を避けるのにも、また彼らの天然の監禁状態である大地の闇がなくなっても常に知覚できるためにも、もはや眼は必要でなくなった」(伝染性謬見) *Pseudoxia Epidemica* III, Chapter 18 [1646] 参照[同]

- (6) Give him his Mine to dig, or dwell G・ハーバートの「悲慘」‘Miserie’[六行詩一三連の詩、WIL・三五九―六四]の四六行目「彼に、一晩中転げ回る彼に相応しい泥を、与えよ」と比較せよ[M・七六〇]

- (7) Scheme = map (OED scheme sb³) [RA・六八〇]

これも二行連句の八音節詩行一六行の小篇だが、簡潔ゆえの一層の辛辣さが小気味よい。尚、本稿筆者もラドマンに賛成で底本の本文に従わなかった。「驢馬びと」を後に「土竜」と言い換えるのがヴォーンの本領の筈だから。

次は、「私」が神の意に副われない事をした時に神が姿を隠したと感じ取って、神を嘆かせたことに許しを請おうという、ヴォーンらしい軽妙な詩が来る。

[四・月] 蝕 The Eclipse

どこへ、おお、どこへ御身は飛んで行かれたのか？
私が御身の神聖な〈眼〉を痛めた時に。

私が我を忘れ、御身の〈心遣い〉と〈審議〉⁽²⁾が全て
妨げられたのを御覧になって嘆き悲しまれた時に。

おお 嘆かないで下さい どこにおられても！

御身の嘆きは機敏な取り消しなのです。

苦痛を与えるだけでなく⁽³⁾ 私の心を

打ち砕き、語りかけるだけで私を赤面させるのです。

御身のお怒りに口付け出来るものならそうしましょう、

しかし（おお！）御身の嘆き、御身の嘆きには降参です。

[M・六六一]

訳注

(1) 冒頭部はG・ハーバートの「探求」"The Search"「八音節行と四音節行とが交互に現れる四行詩一五連の詩、W i l・五五五―五九」の冒頭「どこへ、おお、どこへ御身は飛んで行かれたのか／我が〈主〉よ、私の愛するかた？」そっくりであり、同じく「エフェソの信徒への手紙、第四章第三〇節」"Ephes 4・30"「六行詩六連の詩、W i l・四七三―七四」の第一行「御身は嘆かれるのか」とも似てい

る [M・七六〇]

(2) And all thy Care and Counsels crost 前掲「鍛錬」の六行目と比較せよ [R A・六八〇]

(3) Which doth not only pain...blush to speak G・ハーバートの「対話」"Dialogue"「八行詩四連の詩、W i l・四〇七―八」の最終行「ああ、もはやない！御身は私の心を打ち砕く」と比較せよ [M・七六〇]

(4) Thy anger I could kiss 諺 "to kiss the rod" 答に口付けせよへの言及。子供たちは答打たれる前にこうしなければならなかった。それでこの句は、罰を慎んで進んで受け入れるのに使われた [R A・六八〇]

全て八音節行十行から成る二行連句の作品。"brieve"を他動詞（痛める「古い意」）と自動詞（嘆く）で一度ずつ、名詞 "brief"（嘆き）は三回使って、神を嘆かせながら神に嘆くなど願うのである。

次に、『燧石』所収の「苦痛」「小考」（七）30―31と全く同題の作品が現れる。前者が四〇行の詩であったのに対し、これは全て八音節行の二行連句から成る十四行詩である。

苦痛に「汝」と呼びかけ、その効を認めて受容すること
で苦痛を和らげようという発想がヴォーンらしい。

苦痛 Affliction

おお 来ておくれ、歓迎だ！やって来てはつきりさせて！

《荒野》も汝によって洗われれば光輝くだろうから。

人間は汝に触られて花開くのだし、また 彼は⁽¹⁾

汝が血を抜き取ると 汝の《薔薇の木》になる。

《十字架》⁽²⁾が彼の曲がりくねった道を真直ぐにし、

《雲》⁽³⁾が彼の盛夏の季を涼しくしてくれる。

病氣もまた 汝に祝福されると

気付け薬になり休息になる。

《日光》に当って更に蔓延^{はびこ}る花々は

干からびて枯れて死ぬ、暴風雨⁽⁴⁾でも枯れるが。

落下は欲望に対してさえ公平で

そこでなら甘美なうちに全てが息絶える。

おお 来ておくれ、注いでくれ！ どのような風なら

暴風雨と同じように公平になれるのか 汝を和らげるのに。

[M・六六二]

訳注

(1) and he / When thou draw'st blood, is thy Rose-tree 111)

はおそらく、人間は苦痛を味わって栄えるのだ、の意。苦痛によって抜き取られた血が薔薇に譬えられている [R A・六八〇―八一]

(2) Crosses キリストの特に十字架上の苦痛。「愛と、鍛錬」

「小考(五)18」の九行目「御身の犠牲による《十字架》によって治療される」とは 参照 [R A・六八一]

(3) dog-star days 大犬座の主星シリウス (the Dog Star)

が太陽と同時に昇る夏の日々は猛暑と乾燥の時期 [同]

(4) The fall is fair evn to decline ヘンリー・ウォotton [Sir

Henry Wotton, 1568-1639. 英国の詩人・外交官] の詩「サマセット伯の突然の監禁について」“Upon the Sudden Restraint of the Earl of Somerset” 9-12 の「」かもし偉

大さが空気の塔を／信頼するほど盲目なら／善意から言わせてほしい／落下は公平であるべきだと」と比較せよ

[同]

最初の妻は若くして病死したし、年少の弟や双生児の弟にも先立たれ、自らも病気で苦しんだヴォーンは、苦痛に對してやって来いと敢えて挑戦する。どのような心の「風」状態を作り出せたら耐えられるのか。苦痛も神の人間への試煉なのだ、というわけで、苦痛は実は苦痛ではなく平穏なのだ、と始めた『燧石』の中の同題詩と主旨は同

じだが、あの作品の方が具体的に豊饒な心象と深い思索に
充ちていて確かに遙かに勝れていた。こちらの小篇は、ま
あ、拾われた落穂というところではあろう。

次にもう一篇、『燧石』所収のと同題の詩が来る。

引退 Retirement

清々しい耕作地と森よ！ 〈大地〉の美しい顔、

〈神〉の足台⁽¹⁾にして人間の住み処。

私は訊ねたりはしない、何故最初の〈信者〉⁽²⁾が

〈田園〉に住むのを好んだのかなと。

敬虔な満足を確保せんものと

小さな森と泉のそばに住み処の天幕を張った人だ、

そこなら果てしない空と 高く輝く

あの荘麗な光を見晴かせたことだろう、

流星が飛翔し、霞がかかり、驟雨が降り注ぐ中で

丘陵を、木々を、牧草地を〈花々〉⁽³⁾を従わせながら

祝福するのだ一瞬一瞬、〈国王〉と 全てのものを

一つ一つ聡明にも手懸けられた〈造物主〉を。

私は訊ねたりしない、何故彼が幸せなママレの

聖なる小さな森へ移って行つて

平野の〈都会〉の地を去り

ロトとその不首尾に終った一行の許へ行つたのかなと。⁽⁵⁾

〈都会〉でのあらゆる様々な〈欲望〉は依然として

見あたるものだ、それらは〈悪〉の〈玉座〉だ。

陰鬱な者は〈沈み〉、そこでは血が流され

〈獄舎〉は不潔だらけとなる。

しかし田園の風合いが爽やかな防護柵になつてくれるのだ⁽⁶⁾

敬虔と無垢との。

あそこは〈柔和な人々〉の穏やかな地域であり、そこに⁽⁷⁾

〈天の御使いたち〉が降下し、辺り一帯を治めるのだ、⁽⁸⁾

そこに天国が〈使節〉⁽⁹⁾を置き、〈鳩〉が

〈露〉のようにしかるべく上空より訪れるのだ。

もし〈エデンの園〉がいやしくも〈大地〉の上にあるなら

それこそがここで、それを我らは〈田園〉と呼ぶ。

[M・六六二—六三二]

訳注

(1) God's foot-stool 「オリヴ山」(三) A 「小考」^(六)

22 「二五—二六行目」この広々とした球体は／全て彼の

かたの狭い足台にすぎず」、及び「イザヤ書」66・1「天は私の玉座、地は我が足台」参照「RA・五四六、六八一」

(2) *Believer* アブラハム、信仰者の最初の偉大な例、「創世記」12他「F・四一八」

(3) *Subjected hills*,... (神の力の証として) 投げ落とされた丘陵:、「イザヤ書」40・4「谷は全て身を起こし、山と丘は全て身を低くせよ」参照「RA・六八二」

(4) *Mamre's holy grove* 欽定訳では「創世記」18・1「主はマムレの平野 (Plains) でアブラハムに現れた」だが、ジュネーヴ版では「もしくは檜の小森」(or oak grove)と傍注がある「同」

(5) *Lot and his successful train* 「創世記」13・10—11「ロトは目を上げてヨルダン川の平地の都市を見晴かした...」。ソドムとゴモラが滅ぼされた時、ロトと直系の家族しか逃れられなかったという点で、ロトに従った一行は成功しかかったわけだ「同」

(6) *fence = defence* 「H・四一八」

(7) *the Meek's calm region* 「メタイによる福音書」5・5「柔和な人々は幸いである、彼らは地を受け継ぐのだから」参照「RA・六八一」

(8) *rule the sphere* プラトン流の宇宙にあっては惑星の各々にはそれぞれ天の霊が住んでいた。その考えがこの箇

処では、田園は天使の支配力下にある一つの領域だとなっている「同」

(9) *Leiguer* = Ambassador, *OED* ledger sb 6. 参照:

『墮落』「小考」(二) 55 の二五行目「天使たちはこころでは〈使節〉だった」、及び『アスクの白鳥』(一六五二)所収のヴォーンの詩「我が博学な友人T・パウエルに、彼の、マルヴェツィ著『キリスト教徒政治家』の翻訳成立に際して」「M・六〇」の一〇行目にも同じ語がある。

同語はヴォーンのお気に入りの二人の著者も使う。G・ハーバート「聖書」一「The H.Scripts. I」四行詩「WIL・二〇八」の一一行目「御身は」での天国の使節 (ligger)」、及び、フェルサムの『決意』(Owen Feltham, 1602-68, *Resolves*, [1623]) の一二行目「善人は全」での天国の使節 (leiger)「RA・五六三」

三、四行目 (各々九音節) 以外は全て八音節行の二行連句二八行の詩。『燧石』の中の同題作「小考」(八) 28—30 の一行ずつ五連五五行の作品の殆ど半分の詩行で、天国が使節を置いてくれる田園での「引退」讃歌とみえる。しかしヴォーンはこの時点で決して引退していたわけではない。引退の心境に馴染んできた趣は感じさせながらも、こ

の作者の例にして例の如く、実はそれ程単純ではない。現に次には、蘇生を希い、夜明けを尚も待望する作品が現れる。二篇続けてみてみよう。

蘇生 The Revival

広げよう、広げよう！ あの方の光を取り込もう、
あなたの〈心遣い〉を夜より短くする方^{かた}のを。

その〈喜び〉は、あの方の〈明けの明星〉⁽¹⁾と共に湧き上り
それを彼は皆に分け与える、眠たげな〈眼〉は別にして。

この世の人々が得られないもの、
将来の至福に恵まれた^{ドロブス デキ}暁や露も。

聴こよう！ どれ程あの方の風がその調べを変えてきたか
温かなささやきであなたを呼び出しているか。

霜は消えた、暴風雨は過ぎ去った、
そして後ろ向きの生命^{いのち}が遂にやって来る。

聳え立つ小森は明らかに〈喜び〉ながら

〈山鳩〉の声に受け応える、

すると ^{ダスト デート}埃と泥の中に、 おお ^{ここに}ここに

あの方の愛する〈百合の花々〉が現れる！

訳注

- (1) Day-star 起き上ったキリスト【R・A・六八二】／「ペトロの手紙」二、1・19「夜が明け、明けの明星があなた方の心に昇るまで暗い所で輝く光と同じようにこの預言者の言葉に留意して下さい」【F・四一九】

- (2) Hark! how his winds...appear! ハンコから最終行まで、「雅歌」2・11—12「らん、冬は去り、雨は止んで終った、花々は地に現れ出で、小鳥の歌う時が来た、我らが里にも山鳩の声が聞こえる」／同6・2—3「私の恋しい人は園へと、香草の花床へと降りてゆき、園で家畜の群れを飼ひ、百合の花を集めています、私は恋しいあの人のも、恋しいあの方は私のもの、あの方は百合の中で群れを飼っています」【M・七六〇】

弱強四歩格八音節詩行の二行連句十四行詩。「あの方、彼」は〈神〉を、「あなた」は〈主〉を指す。Day-star, deals, drowsy, drops, deus, dust, dirt ɔ which, with, what, world, winds, warm, whispers' とのd音、w音の頭韻が響いて軽快な作品。〈蘇生〉とは「後ろ向きの生命」が反転するこ

とであり、「眠たげな〈眼〉」ではそれは叶わないのだ。

リーシュマンの「どの詩人も、シェリーでさえ、光をこれ程美しく書いた人はいないし、夜明けの特別神聖な意義 (Sacramental significance) をこれ程巧みに表現した者はなかった」という評がある [L・一六二]

夜明け The Day-spring⁽¹⁾

早い時刻、まだ闇が活発で

星々できらめき飾られていて 日中より心地よい時、

〈天国〉の〈百合〉と〈大地〉の気品高い〈薔薇〉⁽²⁾が

緑の不滅の〈若枝〉⁽³⁾が 起き上ったのだった、

それで人里離れた所で

父に向かつて彼は 父に祝福された顔を下げた。

この穏やかな季節を 我が〈王子〉⁽⁴⁾が喜ばれても
その充足ぶりを証拠立てる必要など全くないだろう、

どうして貧しく愚かな羊の私が

彼の、慣習ばかりか時間まで守らねばならないのだろうか？

彼の手がこういうものなどに縛られていて

彼から時が束の間の〈貸借契約〉を結んでいるから⁽⁵⁾

ではなく 朝ごとに新たな〈創造〉がなされるからだ、

人々は一晩中 彼の〈心遣い〉によって救われて

静かに回復している、だから彼が 彼らが

昼日中に感謝しているものとお考えでも 当然だろう。

だから彼の手に成るあの最初の草案⁽⁶⁾に対して

それが天と海と陸地を完成したのだから⁽⁷⁾

〈神〉の〈子ら〉はそれぞれ感謝を捧げたし、

〈明けの明星〉⁽⁸⁾は悉く 歌を歌ったのだ。

おまけに、それまで彼のものとなってきたのだ

生れた全てのものの中の初子が、

そこで今や来る日も来る日も彼が救い賜う全てのものから

それぞれの〈魂〉の最初の想いと成果を彼は熱望される。

そのため彼は日々、この早い時間に

恩寵を放ち 降り注ぎ賜うのだ、

それは彼の〈心遣い〉と〈親切〉とを示すものであり

善なる者を激励し、緩やかな者を活気づかせるのだ。

丁度 敬虔な友人たちが遅れを嘆き

一分ごとを一時間の停止だと考えるように

彼の神聖な愛情深い〈鳩〉⁽⁹⁾が

憧れの必死の努力を振り絞って舞い上り動き⁽¹⁰⁾

私たちの回りを飛び廻るのだ 私たちが眠っている間に、
時折りは実のところ あの手から覗き込んで
輝いたりする、しかし常に必ず⁽¹²⁾

《太陽》がゆつくり覆いを外す前に

新たな《思い遣り》となつて光のようにぱつと現れ
《朝の様子》⁽¹³⁾となり、それが夜を追い散らすのだ。

それでああなたは ずっと見詰めて来られたのに御自分が

創造された者に

あなたの前でも眠つたままにさせておかれるのですか？
何故彼の墮落を放置したまま

彼を嫌がられる忌まわしい驚きの対象になさるのですか？
これらは抵抗はされても 再び

生きている者を滅ぼされた者へと引き戻すというのに。

おお この《天罰》を変えて下さい！ さもないと今まで

のところでも

やはり私の背信に相応しい人は他にいなくなるでしょう
消し去つて、消し去つて下さい！ 死でも出来ないのです⁽¹⁴⁾
私がどうしても従いたくないものを消し去ることは。

[M・六六三—六四]

訳注

(1) 表題は、夜明けとキリストの両方を意味する。「ルカに
よる福音書」1・78「私たちの神の優しい憐れみによつて
夜明けが高みから私たちを訪れた」[F・四一九]

(2) *Heaven's Lily... his blessed face* 「マルコによる福音書」
1・35なるヴォーンの自注がある。「朝まだ暗いうちにイ
エスは起きて人里離れた所へ行き、そこで祈つておられ
た」

(3) *BRANCH* 「エレミア書」23・5「見よ、このような日
が来る、と主は言われる、私はダヴィデのために正しい若
枝を起こす」[RA・六八二]

(4) *my Prince* 前掲「鍛錬」の第一行の「王子」同様ギリ
ストを指す。

(5) *From whom time holds his transient lease* 「死」[(1)
B]「小考」(六)16—17「の八—一〇行目」誰かが貸借契
約を軽んじる…それで隠遁所と四阿とが共に使用料無しな
のだ」と比較せよ[RA・同]

(6) *So for that first draught... and land* 「箴言」8・27「主
が深淵の面に輪を描いて天の準備をされた時、私はそこに
居た」、同28・29で主は、深淵の源を強化し、大地の土台
を定めた[同]

(7) *Which finish'd... did sing* この三行の部分にヴォーンの
「ヨブ記」38・7なる自注。「私(主)が大地の礎を築き、

その広さを定め、それを測る縄を張り：隅石を置いた」
「その時、夜明けの星々はこぞって喜び歌い、神の子らは
皆歓声をあげた」

- (8) Besides...that bore 「創世記」 4・4 「アベルは自分の
飼う羊群から初子を主に持ってきた」／「出エジプト記」
13・12 「初めに子宮を開くものは主に捧げなければならな
い、自分の家畜の初子のうち雄は主のもの」【F・四二〇】
- (9) Done = the Holy Spirit 聖霊【RA・六八二】
- (10) With longing throws 「ローマの信徒への手紙」 8・26
「霊」が言葉には言い表せない呻きを挙げて執り成して下
さるからです」【同】 throws = throes
- (11) that look 「雅歌」 5・5 「私は恋しい人に戸を開けよ
うと起き上りました、私の両手は：ミルラの滴は指から取
手にこぼれ落ちました」【同】
- (12) without fail...new Compassions 「哀歌」 3・22 「主の慈
しみは決して絶えることはない、主の思い遣りは尽きるこ
とがないのだから」【RA・六八三】
- (13) And Morning-looks, which scatter night 「イザヤ書」
58・8 「あなたの光は曙のように射し出て、あなたの健康
は素早く回復され、あなたの正義があなたを先導し、主の
栄光があなたのしんがりを守る」【同】
- (14) Dissolve, ...submit unto ヴォーンの、オウイディウスの
詩の英訳【M・六七】二九―三〇行目「私がどうしても同

意しようと思わない〈行為〉には運命の女神も同意出来な
い」【M・七六〇】

自分がどうしても従えないものは、たとえ死んでも自分
では消すわけにはいかないから神に消して欲しいのだと訴
えるこの作品の基調は、既に『燧石』の諸作で馴染みのも
のだった。神に訴えるということは、神がヴォーンの願い
を聞き届けてくれないからである。ヴォーンは、そして彼
と神との関係は、少しも変っていないのだ。そこで再び、
訴えなくてすんでいた状態、それは確かに彼にはかつてあ
ったのであろうが、その回復を希うことになる。しかも
一種の愛想尽かしを表明しながら。

回復 The Recovery

我らが日々の光溢れる美しい〈器^{ヴエスル}〉、その誇り高く
先導する栄光がああ赤らんでいる〈雲〉を金色に飾る、
その活発な火が 素早く投射されてきらめくのだ
丘から丘へ、そして時折り屈折しては
何か近隣の岩とか木を ぴかぴか光らせる、それから

おずおずと翼を拡げた炎となつて再び飛び去つてゆく、

もしもあなたがこの日

このまま歩み続けるなら

御承知あれ、私はあなたのより偉大な光を浴びてしまったのだと、

光をです、その陰と後ろ⁽¹⁾があなたを輝かすことになる。

だからあなたを降ろそう、だからあなたを降ろそう、

私は今や私だけの〈太陽〉を浴びている。

II

あの気難く生きている人々、あなたの〈光線〉がなくては戸外では動けないのだが、あの人々なら あなたの光彩を讃えられよう、

だから光を求めるのだ（光は欲望が知らないもの！）

あなた（弱々しく光る人！）に向かつて、盲目のペルシャ人⁽²⁾が頭を下げるように、

しかしあの〈太陽〉が、あなたの頭を踏みつけながら⁽³⁾自らの明るく輝く永遠の〈眼〉から 輝き燃える

〈光線〉を注ぎかける所では

あなたの死んだような日は

必要でなく、解き放たれた光には人間もそうなのだ、

それが あなたには示すことも見ることも叶わないものを示すのだ。

だからあなたを降ろそう、だからあなたを降ろそう、私は今や私だけの〈太陽〉を浴びている。

〔M・六六四—六五〕

訳注

(1) *back-parts* 「出エジプト記」33・23、神の栄光をまともに浴びると生きていられないので、神は自らの後ろしかモーセに見せないようにして彼を護った〔M・七六〇〕

(2) *blind Persians* 後にインドのパールシー教徒に受け継がれることになる、ペルシャのゾロアスター信奉者たちは火を、特に太陽に具現化された火を崇拜した。ヴォーンは「盲目の」を字義どおりに（太陽を過度に長く凝視することにより）と、譬喩で（似非の神を崇拜するせい）との両方の意味で用いたか〔R・A・六八三〕

(3) *that Sun, which tramples on thy head* G・ハーバート「ヨルダン（一）」「Jordan（二）」「六行詩三連の詩、W i L・三六五—七」の一—二行目「豊饒すぎて太陽に被せられないようなものは無さそうだ／彼の頭を踏みつけるあの喜びなら尚更のこと」と比較せよ〔M・七六〇〕／

「〔記七〕彼らは皆 光の世界に行ってしまった!」〔小考
(九) 15―17〕の九―一〇行目「…その光は私の日々を踏
みつける」とその訳注(3)を参照「RA・六八三」

十音節詩行六行と二行の間に四音節詩行が二行来て、最
後に八音節詩行が二行現れる、十二行ずつ二連から成り、
いずれも二行連句である。各連の最後は同じ二行が使われ
る。この反復が軽快で、それだけに辛辣に響き、巧妙であ
ろう。

『燧石』所収の作品と同題の詩がもう一篇あるので、こ
こから先七番目のその詩をみてみたい。何と、次の作品で
ある。

世界 The World

それは何なのか 誰か教えられる? 君かな、

君自身はそのまま変らずにあの(罪)を抱きながら
君の様々な考えを巻いて(糸玉)にして他の考えを

導いてゆくあれとは。

私は、長いことその中に棲みついてきて

もしかとは思ったものの
実状はとても救われそうになかったので

見通す視力もなければ

このような(栄枯盛衰)を
弁える分別も持ち合わない。

しかし何にでもそうだから何とでも言えるかも知れない
し、類似点(3)といえはその(真理)を唯 非難し
嘲るだけなので その真理はやはり失われてしまう、

見事な(奇想)の中に、身を切る厳寒の中の流れのように、

私は奮起しようとも思わないし、あの(規則)、

(敗者)にしゃべる許可を与えよ、を破るつもりもない。

だから偽りの汚れた(世界)だし、未知なのだ

汝自身にさえ、

ここに到り私は汝を棄て去り断念するのだ

汝が何を自分のものだと言えるにしろそれらを全て。

汝は(真理)ではない 何故なら試みる者には

汝が全くの欺瞞であり虚妄だと判るのだから。

汝は友情ではない、何故なら汝にあつては

それは政策上の餌にすぎない。

それは、(花々)に潜む(蝮)の(6)ように

特有の毒をあの甘い香りの中から注ぎ出す。

しかもそうでない時には、常にそれは
褪せてゆく顔料であり、短命な、

大氣と《湿氣》の至福であり、外も内も⁽⁷⁾

《海豚》の皮膚の《色模様》のようだ。

しかし一日以上生きしてはならないし

《便宜》上だけのもの⁽⁸⁾で、それで消え去るのだ。

汝は《富》ではない、何故なら一代が貯蔵する

あの《屑》は次代が洗い流し

情け容赦なく一掃してしまうのだから、

それがどこに在ったのか記憶する者も殆どいなくなる。

甚だ激しい急流が周りの富んだ

土地を思うがままに支配する、

それで変りゆく水路が　ここでは復活させ

あそこでは破壊するのだ　以前堆積したものを。

汝は《高位》⁽⁹⁾ではない、何故ならあの華やかな

《羽毛》は擦り切れて脱け落ちてしまうのだから、

それで王子たちは新しい羽毛を何か新たな原点に戻って

用意し始める、優雅なようにゆったりしたのを。

汝は愉悅ではない、何故なら汝の《薔薇》は

棘を付けながら相変らず安らいでいるのだから、

たとえ切り取られなくても忽ち自然に落ちてしまうだろう
が　切り取られた時同様すぐに萎びて死んでしまう。

汝は砂なのであり、グラス一箇を満たすが

それから別の方へと移ってゆくのだ。

だからもし私が汝の動きを停められるなら

汝は塵にすぎないのだ！だから己が道を行って、私を

清らかで明るいままにしておいて欲しい、たとえ貧しく⁽¹⁰⁾て

も

汝を引き留める者は自らの床を単に塗り固めるのであり

それを為し^な了え^なると《燕》⁽¹¹⁾のように

知られざる住み処へと飛び去ってしまうに違いない！

歓迎だ　《日光》と驟雨とで豊饒にされた

純粹な思考と平和な時間は、

歓迎だ　公正な希望^{ホウブス}と清純な^{ホウリ}《心遣い》は、

気が咎めることなく時間と仕事を

共同分担することは、私の最後の

愛しい^{いとあい}《住まい》への　確かな道のりは！

恩恵の《円環》、《中心》、それに　お至高の《至福》よ！

《深淵》のせいで、私が見誤ったり辿り損なったりすることは決してない、あの汝へと到る《小道》を、汝だけが私にとっては全てなのだ！

私には聞こえるし見えている、日がな一日ずっと

あの、寛大な道の騒音と莊麗が、

私は注目する それらの《進路》¹²と誇らし気な接近ぶりに

それらの絹と芳香と、輝く《四輪馬車》に。

しかし汝への狭き道¹³で

私の目に止まるのは 貧困と

軽蔑された事どもだけだ、そしてその先ずっと

ほろを纏った、見窄らしく慎ましい群衆は

やはり徒歩のまま進み続けながら 溜息まじりに

口に出す、「我らが《主》はこうして出かけられた！」と。

私に だから 私の杖をお与え下さい、《森》の中で

青々と生長している時のままのものを。

（あの石の群れは《祭壇》の役に立っていたが¹⁵

滑らかにされても繊細に刻まれてもならなかっただろう）

この粗末な木の枝を手に、私は《浅瀬》¹⁶を渡ろう

ヤコブを真似て、そして汝の貴重な言葉¹⁷を

汝が衣服で飾ってくれたままのを、《機智》¹⁸や

墮落した趣味に汚染されたのではないのを

その道すがらの私の糧にすることにしよう、

その他のものは一切 汝の《僕》¹⁹は食べないでおこう。

かくして、こうして、その他のやり方では

私は腰を上げないのだ、そのせいで嗤われても、

そして独自のやり方を変えない賢明な《世界》¹⁹から離れて

突き進んでゆこう、迷い子になると《判定され》ても。

「M・六六九―七二」

訳注

(1) 標題の示す「世界」を指す

(2) *Clue* 「星座」「小考(七) 22」の一四行目「糸口を巻き戻してゆく」及び「息」「日」「曜日」「小考(十一) 29」

31」の二行目「誘う時の間を導いてゆく(糸口)」参照

(3) *likeness* = semblance, similarity 善悪・真偽についての相似・類似点「F・六六九」

(4) *give Loosers leave to speak*

十六世紀中期の諺、敗者には恨みや怒りを言わせてやれ、というのであり、「そして勝者には笑う許可を」*and winners to laugh* が付く表現もある。敗北者への慰めや償いの意。

G・ハーバートの「交唱聖歌」*“A Dialogue-Anthem”*

ある。敗北者への慰めや償いの意。

G・ハーバートの「交唱聖歌」*“A Dialogue-Anthem”*

「キリスト教徒と死との一〇行の対話詩 W i l・五八一」の七行目「敗者に話させよ」参照 [M・七六〇]

- (5) *Even to thy own = i.e. even to worldings* [R・六八六] 世界に即して生きている人、(世) 俗人にも。

- (6) *a Viper lodg'd in Flow'rs* 諺風の「草中の蛇」の改作。マクベス夫人の科白「罪のない花のように見せかけてその陰の蛇になつていつ下さう」(Shakespeare, *Macbeth* I. v.66) 参照 [R・六八六]

- (7) *out and in... a Dolphin's skin* G・ハーバートの「眩暈」"Giddiness" [四行詩七連の詩、W i l・四四六] の一七—二〇行目「人間とは何たる見ものだったことか、もしも纏う衣装が／心と共に變つたとするなら、／海豚の皮膚のようにその着物はその人の欲望と／連合していることになる」参照 [M・七六〇]

イルカというよりは、水から揚げられたり死に近づくと急速に変化する美しい色肌で有名な魚のシイラ、マンビキ (dorado) の変りやすい玉色虫の色合いのように。これらの魚はしばしば通常のイルカと混同される [F・四三〇]

- (8) *beyond one day/Or Convenience* 即ち、友情の続くのは一日の時間だけだし同じく便宜上の期間だけ [R・六七]

- (9) *Honour = exalted rank* (OED honour sb.4) [同]

- (10) *clean and bright, though poor* G・ハーバートの「妙

薬」"The Elixer" [四行詩六連、W i l・六四一] の一四—一六行目「それ程卑俗になれるものはない、／(御身のために) 彼の色合いが着いても／明るく清らかにはならないだろうから」参照 [同]

- (11) *Swallow-like* リリーの「しかし汝ユーフューズはどちらかというと、夏は家々の軒下を這い、冬になると背後に汚物しか残さないで去る燕に似てゐる」(John Lyly, *Euphues*, 1578, p.234) と比べよ [同]

燕は家屋の囲りに一時的に(しかも汚く) 住む借家人として悪名高い [F・四三一]

一六世紀中期の諺「燕は偽の友人のように冬が近づくと飛び去る」"Swallows, like false friends, fly away upon the approach of winter."

- (12) *their* 前行の「騒音と莊麗」(noise and pomp) で、それで表されるべきらしい人々

- (13) *the narrow way* 「悔い改め」【小考(八) 53】の七—九行目「(あの) 小さな門と／狭い道を…」及び、その訳注(一) 参照

- (14) *my staff* 「マルコによる福音書」6・8「そして(イエスは十二人に) 旅には杖一本の他は何も持たないようにと命じられた」[R・六八七]

「杖」は支え、頼りになるもの。諺「パンは生命の糧」"Bread is the staff of life." my は「私に相応しう」の意

- (15) Those stones, which for the Altar serv'd 「創世記」 31・46 「ヤコブは一族の者に、石を集めてきてくれ、と言ったので彼らは石を取ってきて塚を築きその塚の傍らで食事をした」[RA同]
- (16) He pass the Foord / As Jacob did 「創世記」 32・10 「私は御身が僕に示して下さった全ての慈しみと真理を受けるには足りない者です」[RA同] 直ぐ続いて「かつて杖を手に私「ヤコブ」はこのヨルダン川を渡りました」。ここの祭壇の石はおそらくヤコブがベテルで築いた祭壇への言及(「創世記」35・7)であろうが、それは刻まれた石ではなく天然の石で出来ているとヴォーンは考えている[F・四三三]

- (17) thy dear word 「マタイによる福音書」4・4 「人はパンだけで生きるものではない、神の口から出てくる言葉の一つ一つで生きるのである」[RA同]

- (18) not as With...poysond it 「最後の審判」[(一) B]「小考(六)20—21」の三五—三六行目「不信心な才智と能力で『聖書』に／＼ごり押しされる改竄も」と較べよ[RA同]／「蜜蜂」[後出]六三—六五行目参照[M・七六一]「wise World」[コリントの信徒への手紙]一、3・19「この世の知恵は神の前では愚かなものだからです」[RA同]

ここに言う「世界」とは、宇宙の森羅万象を悉く含む世

界から、人間の世界、俗には世間、世の中など広い意味を包含するだろうが、その「世界」とは何かが吟味される。作中、本稿筆者が*印を付した箇处以降、「世界」が否定形で、真理、友情、富、高位、愉悅、ではないと五通りに定義された後、それは、砂なのだと、肯定形に移つての定義と吟味になる。ヴォーンの作品中最も有名な一篇である『燧石』の中の「世界」[小考(二)62—63]と並べても、この詩は決して遜色がない、補遺と増幅の秀作であろう。これに直続する力作長篇の実態を最後にみておくことにして、この二篇については次稿で改めて論じたい。

蜜蜂 The Bee

肥沃な花壇と花咲き溢れる植込み⁽¹⁾から

荒廃をもたらず「階級」と「序列」へ区分けされている所、身分が単なる「真理」が必要とするより多くを握り締め健全な「葉草」が「雑草」によって餓死させられる所、

そのような野生の「森」へ私は出かけてゆく、偉大な聖ヨハネの粗末な「食物」⁽²⁾を目指し求めて。

真実と敬虔が「支配者」にも

《聖職者》にも欠けていて見られない時に、
憐愍が冷たいというより死んでいて

富める者が《貧しい者》をパンのように食べる時に、
党派の頭目連が公然と力づくの⁽³⁾

《騒動》をまず引き起こしてから掠奪品を分配する時に、
そのような時 神の山ホレブへエリアは行く、
すると《砂漠》には《薔薇》⁽⁵⁾が育っているのだ。

万歳 《水晶めく泉》と清々しい木陰よ、

そこに傲慢の侵入する様子はない。

忙しい俗人が一日中

悲しい《引退者》を狩り出すこともない、

万歳 幸せな無害な独り居よ、

粗野で軽蔑に満ちた世界からの

我らの《聖域》よ、信仰篤く希望に満ちた

神聖で穏やかな隠遁所よ！

ここにはやはり何かしら《エデンの園》めくところがある

《森》に《蜂蜜》、《小川》には《甘味シロップ》と。

《花々》も、その《甘い香り》は奪い取られることなく

貞淑な口付けで冷たい露が欲び迎えている。

《一日》の労苦が終り

疲れた世界が《太陽》と共に翳り始めると
ここで飛び去る風と流れゆく《泉》は^{フレイグ ウィンド フローイング ウォールズ}

知恵のある注意深い《隠修士》の《鐘》だ。^{ベルズ}

そのせわしいざわめきは一晩中
褒め称えるか祈るかするように続き^{プレイズ プレヤー}

厳肅な音で彼の胸を

引き止め 恭しく利用するのだ。^{うやうや}

《東方》では《曙》が顔を赤らめ

ここでは冷たい爽やかな《精霊》が空気を磨き立てる、

《葉草》は《真直ぐ》起き上り、《花々》は顔を覗かせ伸び

広がる、

《木々》は賞讃を囁き 頭を下げる。

《鳥たち》は夕闇から解放されて

辺りを見回し、それから巣から立ち上り

嬉しさを一つにまとめて歌い出す

朝の《王様》の栄光を。

かの《隠修士》は耳を澄まし、穏やかな声で

表明する 自らのと彼らの《喜び》を、

それから祈り始める 世界の悉くが

快く統一され 祝福されるようにと。

もし突然の暴風雨に見舞われると

彼らは彼の周りに群れ集って陰になってくれる、

そこで賢くも彼らは目的が果せるものと思ひ

その嵐に 行き過ぎる時間を与えるのだ、

そして大枝などを避難所にして揺ぎないのは

ヒラリオンの召使い、あの賢い「カラス」だ。

おお 光耀くますます清らかな年月よ、恩寵よ！

その違いは大きい、あの、御身と

我らとの間の空間のように、なにしろ我らはやみくもに

似せの火を追いかけて「太陽」から離れるのだから。

己自らに公正な「自然」も 艶のない顔料や

分捕品ほどにも富んでいないのではないか？

「源泉」での流れも 刻み取られた「石」や

「鉛」の上の流れほど爽やかでないのでは？

それでも空想と何か「芸術家」の道具類とは

愚か者のための「宗教」を形造るのだ。

真理は一たびはつきり教えられと⁽⁸⁾

今度は棘と茨に満ち溢れたものとなる。

ある部分には大胆な「寓話」の斑点が着き

ある部分は異様な「評言」で酷く汚れている、

そしてその他は ^{ブラッド・ブレイム} 血と恥との不和（昔からの

「墮落の鶏冠」⁽⁹⁾ が汚染してしまった。

それで「雪」が、最初に降る時は

清らかな天国のように白そのもののなに

「人間」が触れると忽ち白無しになり

踏みつけられた後は どうしようもなくなる。

おお 導いて下さい 私が見つめられることなく

真理と「霊」の点で御身の役に立てる所へ！⁽¹⁰⁾

悩まされずに私が偉大な御身御自身と親しみ、それで

御身からの贈物を感謝をこめて事細かく数え上げた上で

全身これ恵みそのものである御身の倉庫から

更にもっと多くを請ひ希える所へ！

私にお与え下さい、「蜜蜂」の「智慧」を、

彼女の飽きることなき「勤勉」を、

今日の日々の野生の「瓜」⁽¹¹⁾ から

私が「健康」と御身への賞讃を引き出せるように。

何しろ暗闇を光に変えて 私の弱さの中に

御身の力をお示し下されるのだから！

どれ程必要にしる 私に「植物」から

元氣回復の源を求めさせないで下さい、

〔M・六七二―七四〕

御身がそうは定められなかった！全ては根こぎにされなければならぬのだから 御身から生長しなかったものは。

庭でも〔四阿〕でもなく 柵でも

装飾整備花園でもないので 花々に健全な姿を与えるのは、それをするのは御身の善意でありそれを真理と純粋さが獲得するのだ やはり。

それで 墮落した者はここから御身の

親切な救済の〔勢力〕を追ひ払ってしまったので

〔乳香〕はもはや手に入らなくなる

ギレアドの〔海岸〕 一帯では、だから

私をお連れ下さい 陰となった庵へ、

御身の最良の〔僕たち〕がかつて住んでいた所へ。

そこで私に御身の〔意志〕を知らせて 見せて下さい

御身が抱かれていた国外追放〔宗教〕を。

御身は暗い〔洞窟〕を〔大広間〕に変え

〔丘陵〕に花を咲かせられるのだから 谷間のように、

その耕やされていない頂という頂を花々で

爽やかな楽しみで 悲しい時にずっと飾りながら、

そのうち そここから 荷を満載した〔蜜蜂〕のように

私は家へと飛んで行き、御身と共に巣箱に入れそうだ。

訳注

- (1) From fruitful beds and flowry borders G・ハーバート「日曜日」"Sunday"〔七行詩九連の作品 W・L・二七二〕の二六―二七行目「それらは神の豊かな庭では／肥沃な花壇であり植え込みだ」参照〔M・七六一〕
borders = estate, or pomp costly display 〔F・四三三〕
- (2) the course Meals of great Saint John 「マルコによる福音書」1・6「ヨハネはラクダの毛衣を着：イナゴと野の蜜を食べていた」〔RA・六八八〕／「マタイによる福音書」3・4、洗礼者ヨハネの粗末な食物はイナゴと野蜜だった〔F・四三三〕
- (3) Coile/And force = forceful Coil 一詞一意「騒動と力」＝「力づくの騒動」、ヴォーンの愛用修辭の一。
- (4) 「列王記」上、19・8他、預言者エリアは神の御使いに食べ物と水を恵まれて力づけられ「四十日四十夜歩き続け、遂に神の山ホレブに着いた」〔F・四三三〕
「巡礼の旅」〔小考（十二）40〕の最終連「…私に食べさせて下さい…私を、〈主〉よ、ずっとこの先も強くして下さい／御身の〈山〉へ旅してゆけるように」参照〔RA・六八八〕
- (5) 「イザヤ書」35・1「砂漠よ喜べ 薔薇よ花咲かせよ」榮光回復の讃歌〔F・四三三〕

(6) *Hilarion's servant, the sage Crow* ヴォーロンはヒラリオンと隠修士パウロとを混同している。この二人の伝記作者

聖ヒエロニムスは、六〇年間半分のバンでパウロを養い、パウロがアントニウスを訪問者として迎えた時には一箇丸ごとパンを持ってきたカラスのことを語っている。しかしヒラリオンの生涯にはカラスは現れない〔F・四三四〕

ヴォーロンは散文作品『オリープ山』〔M・一八三—一八四〕で書いている、「私はエリアのワタリガラス (raven) とヒラリオンのカラス (crow) を褒めるほどにはアビキウスの供宴や、クレオパトラの真珠を溶かした御馳走を讃えたりしない」と。〔M・七一七〕は指摘する、カラスがパンを持ってきてくれたという聖ヒエロニムス〔C340-c420〕の物語は、聖パウロについてのものだ。隠修士聖パウロと聖ヒラリオンの生涯は共に、一六三〇年に英語で出版された『聖ヒエロニムス書簡撰集』に付加されている。もしヴォーロンがこの版を知っていたなら、この二人の隠修士の生涯が並置されていたのが、彼が混同した原因かも知れない〔RA・六八八〕

(7) *false-fires* 欺くために燃やされる火。OED *false14b* 参照〔同〕

(8) 次と比較してみよ、「最後の審判」〔二〕B〕〔小考(六) 21〕の三五—三六行目「不信心な才智と能力で〈聖書〉に／＼押しされる改竄も」〔M・七六一〕

尚、次とも、「契約」〔小考(十三) 14〕の二九—三〇行目「そなたを人間の熱意が解説しては唯／混ぜ合わせるのだ 自己崇拜と身勝手な目的とを」

(9) (old Corruption's Crest) 即ち、我々が墮落をそれと認める時の印の一つ。ミルトンの「まず〈不和〉／〈罪の娘〉」〔失楽園〕X・七〇七—八〕と比較せよ〔RA・六八八〕

(10) *In truth and Spirit to serve thee* 「ヨハネによる福音書」4・23「本当に崇拜する者が霊と真理をもって御父を崇拜する」を参照〔同〕

(11) *wild Courts* 「列王記」下、4・38—41、飢饉に見舞われていたギルガルの地でエリシャの奇蹟によって食べられるものとなった苦い野生の蔓草につく瓜〔F・四三五〕

「悔い改め」〔小考(八) 54〕の七一—七二行目「私は夜のうちに成長し朝には消え去る／罪と悲しみの瓢箪だ」とその訳注(12) 参照〔RA・六八八〕

(12) *since all must be ... not from thee* 「ユダの手紙」12「実が萎れて実らず根こぎにされて二度枯れてしまった木々」〔RA同〕

(13) *forms = paternes* 〔M・七六一〕 色々な形状や大きさの花壇を装飾になるよう配置した庭園。＝orderly arrangements 〔RA同〕

(14) *And Balm ... Gilead* 「エレミヤ書」8・22「ギレアド

に乳香がないというのか、そこには医者がいないとでも、では何故我が民なる娘の健康は回復しないのか」〔R A 同〕
 (15) like a laden Bee... with thee G・ハーバートの「星」
 “The Starre”〔四行詩八連の詩〕W・L・ニ六八〕の三〇
 —三一行目「荷を満載した蜜蜂のように家へと／あの光の
 巣箱に飛んでゆく」と比較せよ〔M・七六〕及びこの詩
 集の中の「郷土 C・W の敬虔な思い出に」〔M・六三〇〕
 の六八行目「彼らは〈仕事〉を終えると昇つてゆき〈巣箱
 に入る〉」参照〔R A・六八八〕

十六行目の「そこに傲慢の侵入する様子はなら」の六音
 節以外は全て八音節詩行の二行連句一〇六行の詩。本稿で
 採り上げた作品のうち「振り返って」(だけは変化に富ん
 だ音節数の詩行と押韻型式) 以外は殆ど同じ詩型である。

*参考文献

本誌『成城文芸』第二二一号(二〇一〇年六月)の拙稿末
 尾(二四—三〇ページ)を参照されたい。以下には本稿での
 直接参考文献のみ挙げる。尚、本稿中、「小考(一)」(「
 小考(十三)」は、本誌既連載の拙稿(第一九九号〜第二二
 一号)を指す。

〔C〕 Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan*, Si-
 lurist. Introduction by H. C. Beeching. 2 vols. London
 and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.

〔F〕 Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry
 Vaughan*. New York: Doubleday. 1964; New York Uni-
 versity Press, 1965.

〔H〕 Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan: A Life and Inter-
 pretation*. Oxford: Clarendon Press, 1947.

〔J〕 Leishman, J. B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert,
 Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.

〔M〕 Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Ox-
 ford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957.

〔M a〕 Marilla, E. L. *The Secular Poems of Henry Vaughan*.
 Uppsala, Harvard and Copenhagen, 1958.

〔R A〕 Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan: The Complete
 Poems*. New Haven and London: Yale University Press,
 1976.

〔W-J〕 Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George
 Herbert*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.